

ちば発

第45号

## 暮らしを拓く



長年、法務省が提唱する「社会を明るくする運動」のフラッグアーティストとして活動されている谷村新司さんにお話を聞かせて頂きました。

## 社会を明るくする運動

最初は13年程前に法務省から「社会を明るくする運動」を世の中の人に知ってもらうために協力してほしいというお話がありました。そこでどうしたら良いかを考え「みんなに目を向けてもらうために僕が“旗”を立てる役割になろう」と思い、フラッグアーティストとしての活動を始めて今も続けています。6年前から始まった「ところをつなぐプロジェクト」では全国各地の更生保護施設などを訪問し、立ち直ろうとしている人達や保護司さんなどを応援する活動を行っています。訪問先では皆で食事をしたりしながら全員とお話をし、最後に必ず「いい日旅立ち」を合唱するのですが、感動して涙を流される方が沢山いらっしゃいます。みんなで歌うことでところにつながる——歌の持つチカラを改めて感じながら、出来る限りこの活動を続けていきたいと思っています。



(写真提供：毎日新聞社)

## 音楽を伝える心

2000年頃に体調を崩したことで、身体からのアテンションだと感じ、家族やスタッフ皆の協力を得て、一度すべてをリセットして自分は何をしたいのか考え、様々なことを学ぶ宝石のような時間を得ました。ちょうどその時に上海音楽学院から「常任教授をお願いしたい。」というオファーを頂いたんです。院長の楊さんから音楽の大切さとは何だと思えますか？と尋ねられ、僕は「心を伝えることだと思います」と答えました。そうしたら楊さんも「理論や技術は勿論大切だが、音楽を伝える心を教えてくれる人は今までいなかった。それを生徒たちに伝えてほしい」といわれ、正式にお受けすることになりました。実際の授業ではまず机に置いたコップに水を入れ「これを見て詩を書いてみて下さい」と言いました。するとほとんどの生徒は見たままを書いていたのですが、2人だけが自分の思いを重ねて表現していました。それこそが詩を書くことに必要な『心出し方』だと伝えました。この詩にメロディを乗せ、それを歌として相手に聞いてもらうことが音楽を伝えることなのです。

## 「辛」 + 「一」 = 「幸」

少年院に入っていた方から「辛いという字は幸せの一步手前」と書いてある手紙をもらったことがあります。辛いことがあるから幸せに向かって頑張れる。長く生きてくると人生プラスとマイナスでゼロになっていくとを感じるようになります。それが当たり前なんだと考えられると、起きること全てに動揺しなくなるし、もし今辛い思いをしている人がいるならば、それは幸せの一步手前と伝えてあげたいです。(次頁へ)

## こころの縁側

縁側は家と外をつなぐ場所。家の内でも外でもない、そこでの交流が人と人とのつながりを持たせてくれる所だと思います。いまはそういう場所が昔に比べて減ってきているように感じています。活動の中で訪れた、「カレーの会」「小中高生の居場所」ではボランティアの大人たち・子供たちと一緒にご飯を食べみんなで「いい日旅立ち」を歌って交流しました。このように周りの大人たちと一緒に大勢で交流することとはとても大事な事だと感じます。

何事も「やらなくちゃいけない」という義務感でやると、される側にも負担がかかると思うんです。目の前で困っている人を助けることが心地よいと思う人が自然に増えていけばいいな、と思っています。それぞれが出来ることをやれるとよいと思います。そんな人たちを歌で支えていくことが自分の役割と思いこれからも心を込めて歌を届けていきたいです。

●法務省「社会を明るくする運動」HP

[https://www.moj.go.jp/hogo1/kouseihogoshinkou/hogo03\\_00024.html](https://www.moj.go.jp/hogo1/kouseihogoshinkou/hogo03_00024.html)

## 令和4年度新規開設WEBセミナー報告

千葉県障害者グループホーム新規開設WEBセミナーは、今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため動画配信という形で8月1日～31日まで行いました。

今年度は「誰もがありのままに、その人らしく暮らすことを地域で実現するために、障害者グループホームは重要な選択肢の一つである。県内の設置箇所数については、年々増加の傾向にあるが、それに伴いさらなる質の向上や求められる役割も広がっている。本セミナーは、グループホームの開設に関心のある個人・事業所に対し、障害者グループホーム制度に対する基本的理解を促すと共に、開設の構想や開設・増設準備において求められる心構えや手順を伝えること」を目的とした内容を心がけました。

今日の障害者グループホームの制度経緯、共同生活援助というサービス特性、今グループホームに何が求められているのか、開設に向けて求められる知識や連携する関係機関、開設に際しての心構えや、当事業が求める開設に向けた理想的な流れについて具体的な手順等を踏まえ解説いたしました。

グループホームという事業をなぜ興そうと考えたのか、必要な方々の顔が見えているのか、理想としたこと・目指すホームの姿はどのような形なのか、開設相談にみえる皆様には必ずお尋ねしております。そこに暮らす人々の（場合によっては）一生をとともに歩む覚悟や楽しみ、事業である以上は長く持続できる計画、根を下ろす地域の資源となる工夫・・・考えるべきことはたくさんあります。

今回の動画では「あるホームの1日」を社会福祉法人一路会様のご協力により、実際の生活の一端を垣間見ることができました。その人の生きづらさに向き合い、「ありのままで暮らす」グループホーム制度設立の原点に立ち返る機会となればと願っております。



# き ど あい ら く 起 努 逢 楽

『起業する努力、出逢いがあって楽になる』

障害者グループホーム等支援ワーカーは  
新規開設のお手伝いをします！また開設後の  
応援もしています！



香取圏域グループホーム等支援ワーカー（以下、支援ワーカー）として2年目を迎え、これまでを振り返ってみますと、前任の部署で5年間福祉の相談員をしており、ある程度グループホームについて知識はあると思っていました。しかし、それらの知識よりさらに深く制度や現場での実情について理解が必要で、対応に苦慮する場面もありました。今日まで業務を行えてきたのは、グループホームの事業者の皆様、関係機関の皆様のあたたかいお言葉やご指導のおかげです。厚く御礼を申し上げます。

支援ワーカーの仕事はどんなものかと考えたところ、グループホームをとりまく課題に対して、解決のための繋がりを作っていくことです。日々の業務の中で携わった利用者の方の事例のひとつひとつを記録し積み重ねていくことは、別のグループホームに役立つ情報資源となります。これを支援者間で共有し検討していくことで、解決に繋がると実感しました。

香取圏域における障害者グループホーム等連絡協議会では、グループホーム業務における様々な研修（勉強会）を企画・運営しています。これも福祉の関係機関を結びつけ、新たな問題解決を生む繋がりを作ることだと思います。より良い繋がりを創出していくためには何をすればいいのか、新しい何かはないかと日々模索しています。

先日、重い精神障害を抱えた方の治療過程のお話を伺い「つらい時期を乗り越えて、何気なく道端で、蝶々が飛んでいる様を見てキレイだなと思えるようになった。今の私は幸せです。」という言葉が心に残りました。グループホームの支援とは、そうした日常の安心した暮らしを提供することなのだと思います。これからも皆様とともにより多くの方々にグループホームでの安心した暮らしが届いていくように、支えていけたらと思います。

香取圏域障害者グループホーム等支援ワーカー 青谷 亮介

香取圏域概況（令和4年7月31日現在）

事業所数：18事業所 定員数：212名 ホーム数：51住居（内サテライト型3住居）

## ◆編集後記

取材で“こころの縁側”と谷村新司さんがおっしゃいました。とても響きました。

縁側みたいな居場所と心の交流がある、安心できるグループホームをこれからも増やしたいです。



**発行者** 千葉県障害者グループホーム等支援事業連絡協議会

**事務局** 香取圏域障害者グループホーム等支援ワーカー  
香取市高萩1100-2

（社会福祉法人ロザリオの聖母会 香取障害者支援センター内）

**編集担当**

長生・夷隅圏域障害者グループホーム等支援ワーカー 金沢千絵